図書館だより
# HAKUOH
第63号 2024. 10
白　鷗　大　学

## 『スムマ』

経営学部准教授
藤　浪　英　也

白鷗大学に着任し、驚いたことがあった。

『スムマ』があるというのだ。

大学図書館に、ルカ・パチョーリ（パチオリともいう。）が記した『スムマ』が所蔵されているという。当時の図書館長であった渡辺 金愛先生のご尽力により購入することができたと聞いた。会計学を学んだ者は、歴史的価値がある書物として、『スムマ』の名を知らない者はいないだろう。しかしこの『スムマ』を所蔵している大学図書館は、そう多くはない。私も実物を見る機会はなかった。それほど貴重な書物である。

『スムマ』の正式名称は『*Summa de Arithmetica Geometria Proportioni et Proportionalita*』、イタリア語で書かれており、日本語の題名は「算術、幾何、比及比例全書」とされている。ルカ・パチョーリは数学者であり、数学書として書かれたものの一部に複式簿記について纏められた部分がある。簿記に関する資料は、『スムマ』以前にも多くあるが、印刷物として出版された複式簿記解説書としては最古のものとされており、歴史的価値がある書物とされている。

それが2015年の豪雨により、思川支流が氾濫し、大行寺校舎は水没してしまった。大行寺校舎の図書館に所蔵されていた『スムマ』も大きな損傷を受けることとなった。書物は水には弱いものである。当然の事として、もう二度と『スムマ』を目にすることはできないと諦めていた。しかし、白鷗大学および白鷗大学総合図書館の皆様の８年に亘るご尽力により補修されたと聞き、再び驚いた。学生の諸君も是非一度、総合図書館に展示されている『スムマ』を見てはいかがだろうか？

ちなみに、この水害により多くの蔵書が廃棄された。中央経済社が発行する、税理士受験雑誌『会計人コース』に、私も住民税対策講座として５年に亘り連載講座を持ち、また税理士試験の模範解答も書いていたのだが、すべて廃棄されたのは残念だった。

# 図書館ニュース

## ◆寄贈書案内

### ◉栗山英樹先生（経営学部教授）より

書名：信じ切る力
著者：栗山英樹
発行：2024年３月　講談社刊

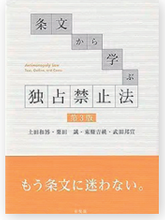
「信じる」ではなく「信じ切る」。北海道日本ハムファイターズ監督就任１年目の2011年リーグ制覇。５年後の2016年に２度目のリーグ制覇と日本一。そして、2023年WBCでの世界一へと、栗山先生が成し遂げた栄光の数々は、「信じる」ことから「信じ切る」ことへの軌跡と言えるでしょう。「生き方で運をコントロールする50の心がけ」というサブタイトルには、運命をもコントロールし得た自負と責任が込められています。

### ◉関戸冬彦先生（法学部教授）より

書名：クラッシュ・ザ・バリケード
著者：関戸冬彦（共著）／鈴木章能・瀬上和典編
発行：2024年３月　金星堂刊

タイトルを日本語にすると「障壁を破壊する」だが、学生運動の頃のバリケードとは時代とスケールが異なります。「個を越えて、分断を越えて」というサブタイトルが示すように、「バリケード」とは、言うなれば自分たちが閉じこもっている「常識」という名の壁で、それを壊して世界を広げるためにも、英米文学を読む価値があるという、研究者の自信と希望に満ちた一書です。

### ◉栗田誠先生（元法学部教授）より




書名：条文から学ぶ独占禁止法
著者：栗田誠（共著）
発行：2024年４月　有斐閣刊

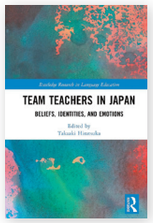
今年３月で本学を退官された先生のご共著。独禁法を条文に沿って学べるテクストで、各条文の内容を、関連する判例・審決等を紹介しながら丁寧に解説。条文相互の関係や隣接他分野についても理解が深まるよう書かれています。

### ◉黒澤和人先生（名誉教授・元経営学部教授）より

書名：教養としてのデータ・情報リテラシー
著者：黒澤和人・舩田眞理子（経営学部教授）・渋川美紀（教育学部教授）・後藤涼子（法学部非常勤講師）
発行：2024年４月　学文社刊

オフィスアプリケーションの活用法を、大学初年級向けPC実習用教材としてわかりやすくまとめたテキストです。学生だけでなく、現代を生きるビジネスマンや一般社会人にとっても、基礎的素養を学習するのに役立つ一冊です。

### ◉宮里恭子先生（教育学部教授）より




書名：TEAM TEACHERS IN JAPAN
著者：宮里恭子（共著）
発行：2023年７月　Routledge刊

本書は本文全てが英語で書かれています。医療の分野では「チーム医療」という概念が充分に一般的ですが、これは教育におけるチームというシステムが、日本でどの様に行われているのか、どのように行うべきなのかを説いたという意味で、極めて先鋭的な一書と言えるでしょう。

### ◉故奥島前学長からの寄贈書

今年５月１日にお亡くなりになった奥島孝康前学長のご遺族より、生前の蔵書から約２万６千冊が本学に寄贈されました。そのうち専門書を除く１万冊近くを大行寺分館にて展示。稀代の愛書家はどんな本を読んでいたか。関心を持った多くの学生に貸し出しました。

## つぶやき

サイモンとガーファンクルが“SOUND OF SILENCE”を歌ってから60年。スマホやSNSの騒がしい日常においてSILENCEとは何か。寄稿原稿の内、二人の先生が「静けさ・静寂」、つまりSILENCEの価値に言及しています。もちろん偶然ですが、ときあたかも館内での学生同士のおしゃべりに対する苦情が多く、あらためて静寂のありがたみに思いをはせるべきタイミングかと思う次第です。

2024（令和６年）10月１日　発行
編　　集　図書館だより編集委員会
発　　行　白鷗大学総合図書館
〒323-8586　栃木県小山市駅東通り2-2-2
ホームページ　https://library.hakuoh.jp
印　　刷　第一印刷株式会社

# 独習にも共同学習にも対応した図書館

教育学部教授
レインボールド・ロレイン

デジタル時代の今日、スマートフォンさえあれば情報は容易に入手でき、SNSで友人と交流することができます。それは便利なことに違いありません。しかしスマートフォンは同時に私たちの集中力を奪いもします。ひとり静かに勉強する空間、友人と落ち着いて議論する空間は、意外と見つけづらいのが事実です。この理想的な学習環境を提供するのは図書館の役目に違いありません。白鷗大学の本キャンパスと大行寺キャンパスの二つの図書館は、膨大な図書と充実したデジタルライブラリーの場であるばかりでなく、一人用ならびに共同用の学習スペースを用意し、学生の学習効率を最大限に引き出す施設です。

大行寺図書館には、学生同士で学び合うための空間「ランゲージ・コモンズ」が併設されています。2007年に津野田先生とレインボールドによって「セルフ・アクセス・ラーニングセンター」として設立され、2017年に地下階へ移動となった際に「ランゲージ・コモンズ」（LC）に改名されました。その後、ラルー先生の参与により、現在のような学生同士の学びの場へと発展してきました。現在はラルー先生のほか、宮里先生、アーサーサン先生、そしてレインボールドがボランティアとして学生の学習をサポートしています。

「ランゲージ・コモンズ」は二つの理念と深く結びついています。一つは「学びの自律」で、もう一つは「学習の共同体」（CoP）です。「学びの自律」とは学習者が自ら学習のプロセスとゴールを定め、自律的に学ぶことを指します。「ランゲージ・コモンズ」では学生が学習の中心であり責任者です。教師は補助的なサポート役にすぎません。また、「学習の共同体」とは共通の興味関心によって結びついたグループが、持続的な議論によって互いに学び合う場を指します。留学生との交流の場としても機能し、異文化や語学の学習効果も期待できます。

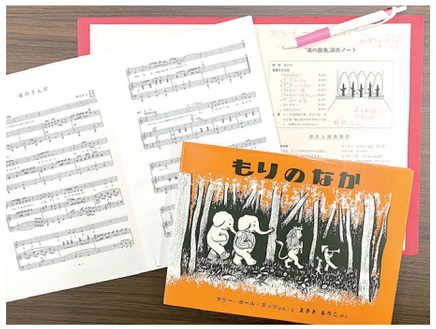
このように、スマートフォンでの情報収集やコミュニケーションでは得られない、アクティブな学びの空間を白鷗大学の図書館は提供しています。独習にも共同学習にも対応した図書館で、皆さんの効果的な学びを実現してください。

# 森の賑やかな静寂と子どもたち

教育学部准教授
山　路　千　華

ドイツの森は深い。その深い森の中で子どもたちと一緒にワイワイ遊んでいると、なぜか静寂を感じる瞬間がある。森の深さゆえだろうか。見上げれば、木々は遥かに高く葉を鳴らし、樹間には鮮やかな眩しい空が見える。絵本『もりのなか』（マリー・ホール・エッツ作／まさきるりこ訳、1963年福音館書店刊）には、森のこの「賑やかな静寂」と言うべき抒情が、エッツの細かく奥行きのある柔らかな筆致でよく表現されている。

ドイツの幼稚園では、月に一度「森の日」がある。かつて筆者が勤務していたハンブルグ日本人学校幼稚部に通う子どもたちも、地元幼稚園の子どもたちと一緒に森へ入る。子どもたちは深い森に怖気づくこともなく、言葉はもとより、文化や風習の違いもするりと乗り越え、打ち解け合って遊んでいる。

ある雪の「森の日」のこと、子どもたちはいくつかのグループに分かれ、それぞれ雪だるまを作っていた。日本人が多いグループは、二つ重ねたダルマ型の雪だるま。一方ドイツ人の多いグループは、ダルマを知らないからヒト型の雪だるま。さらに別のグループは、ダルマ型の丸い下半身に、スマートなヒト型の上半身がのっている折衷型の雪だるま。雪だるまといっても千差万別なのだ。その年、森での遊び体験をたっぷり積んだ子どもたちは、発表会でオペレッタ『森のさんぽ』を演じた。このオペレッタは藤田妙子の作詞作曲になるものであるが、ストーリーは先に紹介した絵本『もりのなか』に基いている。藤田は、『雀の学校』『春よ来い』など数多くの童謡を作曲した弘田龍太郎を父にもち、東京のゆかり文化幼稚園園長でもあった人物である。

さて、時を経て、ここ大行寺キャンパスの３階から、学生の歌声が聞こえてくる。ゼミの学生たちが、オペレッタ『森のさんぽ』の練習を始めたのだ。子育て支援イベントで行う絵本フェスタで上演するためだ。学生たちの歌声はまだ多少遠慮がちだが、耳を傾けていると突然、あのドイツの森の、「賑やかな静寂」が蘇ってきた。学生たちが子どもたちと作り上げるこの森は、いったいどんな森になるのだろうか。